

新義、教学、という、伝統の創造

—阿字本不生を中心として—

鈴木 晋雄（雄 太）

一、はじめに

新義教学という伝統の創造

空海によれば、「阿字とは一切諸法本不生の義⁽¹⁾」である。高神覚昇氏が「阿字への関心なくしては決してそれは完全なる密教の教理研究といふことはできない⁽²⁾」⁽³⁾と言ひ、宮坂宥勝氏が「いうまでもなく、阿字本不生・本不生は真言密教の教理、実践の根幹をなす」と述べるように、阿字本不生は真言密教において最も重要な教義の一つである。また、覚鑠をはじめ真言宗の先徳たちは阿字に関する数々の著作を残しており、阿字本不生は時代を渡って多くの真言学僧に思考されてきた。しかしながら、「それら（阿字本不生に関する著作・研究）のほとんどすべては阿字本不生を自明の理として、それを前提にしているかのようである。だが、阿字本不生・本不生に

はさまざまな問題がふくまれている」⁽⁴⁾との指摘があるように、阿字本不生には多くの問題が潜んでいる。

さて、真言宗智山派は新義真言学派（以下、新義学派）の流れに属するが、新義学派の大きな特色は論義によつて教学の研鑽がなされてきたことにある。そして、新義学派における論義の系譜は、頼瑠（一二二六―一三〇四）の『愚草』↓聖憲（一二三〇七―一三九二）の『第三重』↓運敵（一二六一四―一六九三）の『第二重』『啓蒙』『談義』と流れている⁽⁵⁾。従つて、新義学派を代表する学僧を挙げれば、頼瑠・聖憲・運敵といえる。しかし、その教義の内容をみると、彼らの見解がすべて一致しているとは限らない⁽⁶⁾。

古義教学・新義教学といったとき、立場の相違の中心は教主義にあり、古義は本地身説、新義は加持身説に立つ。教主義に関する研究は多数あり、それらによれば、多少の相違こそあれ、古義系Ⅱ本地身説、新義系Ⅱ加持身説と二つの系統に括ることができる。当然ながら、頼瑠・聖憲・運敵はともに加持身説に立つ。

先行研究によれば、阿字本不生に対する解釈も大きく二つの系統に分けられる。それは、阿字本不生を表徳的にみる本有常住説と、遮情的にみる無自性空説である。両説を唱える筆頭は浄厳（一二三九―一七〇二）と運敵であり、それに伴つて、古義系の学僧は本有常住説を取り、新義系の学僧は無自性空説の立場を取るとされてきた。例えば、

金山穆韶（一二九二）

同一密教内にもこの本不生の理を解することが一様ではない（…略）運敵師は本不生の義に遮情表徳の両義あれども本不生の言は遮情無相空を先とするものであると観らるるので浄厳師は本不生には遮情表徳の両義あるも、密教にては本不生は表徳本有を先きとするといはれるのと、ちょうど正反對にいはれるのである⁽⁷⁾。

石村祐天【一九九四】

本不生の解釈には、古来、種々の異説があるが、その最も代表的なものは勿論、疏家と宗家である。疏家善無畏は遮情的空系の本不生を説き、宗家空海大師は表德的有系のそれを説かれた。そして、後世、これらの両説を継承し、最も明瞭にその学説を発表・論争したものは、江戸元禄の学匠たる運徹僧正と浄厳和尚である。両匠の論争点を結論的に言えば、運徹僧正は、主として従縁生無自性空の立場より本不生を眺め、浄厳和尚は、色心本有常住の立場より本不生を解釈されている。古来、新義にては運徹僧正の説をとり、古義にては浄厳和尚の説をとっている。そして、この新古の論争は、現在に至るまで脈々と続けられているのである⁽⁸⁾。

宮坂宥勝【一九九八】

古来、本不生について多くの解釈がある（…略）その主要な学説は、浄厳の本有常住説と運徹の無自性空である。浄厳の本有常住説は色心本有で宗家に近く、古義系真言宗の学匠はこの立場を取るとみられ（…略）他方、智山の運徹は無自性空を主張して疏家に近いとされる。いずれかといえば新義系の学匠はこの立場を取っているようである⁽⁹⁾。

とある。このように、先行研究では一括りに、古義系Ⅱ表徳・本有常住説、新義系Ⅱ遮情・無自性空説とされてきた。しかしこれについて、今一度考察しなければならない。なぜなら、古義を浄厳に、新義を運徹に代表させ、一口に古義系・新義系と括ってしまうことは些か早急であるように思われるからである。そもそも阿字本不生について、表徳・遮情という視点から、頼瑠や聖憲など新義学派を代表する学僧の解釈を論じた研究はない。古義

系・新義系と二つの系統に括るのであれば、浄厳・運敵に限らず、古義学派・新義学派の解釈の展開を把握することが要される。

そこで本稿では、頼瑜・聖憲・運敵の言及を中心に新義系の解釈の展開を探っていく。^⑩

二、真言学派における二系統

(一) 教主義からみる二系統

先にも触れたが、新義・古義の一番の相違は教主義にある。本地身説を取る古義学派では、「顕教では法身は説法しない、密教では法身が説法する」と顕密対弁のみで解釈する。それに対し、加持身説を取る新義学派は、顕教の法身不説に変わりはないが、密教の法身を説法する加持身と説法しない本地身に区別する。そして、この見方は四重秘釈に関わってくる。四重秘釈とは、ある事柄を四重によつて解釈する方法であるが、新義学派は四重秘釈を用いて教主義を解釈する。新義学派の四重秘釈をまとめると次のようになる。

顕…第一重…遮情の無相―顕教の教主が妄語（非如義語）で説く顕教の極位

第二重…有相の有相―密教の教主（加持身）が如義語で説く真言劣慧機の為の法門

密…第三重…無相の有相―密教の教主（加持身）が如義語で説く真言勝慧機の為の法門

第四重…無相の無相―密教の教主（加持身）も説くことのできない密教の極位

一方、古義学派の教主義は、

顕…遮情―無相―顕教の教主は説くことができない

密…表徳―有相―密教の教主（本地身）は説くことができる

と、二重の解釈である。真言密教に限らず、仏教各宗は自宗の優位性を主張するために教相判釈をなす。真言宗においては、新義・古義を問わず、どちらも密教の優位を主張しなければならない。古義学派の二重の解釈はわかりやすい。古義学派にとって顕密の相違は、果分の可説不可説にある。つまり、顕教は果分を説けないのに対し、密教は果分を説ける。しかし、顕密の相違を果分の可説不可説に置くと、「顕教も密教も果分自体は同じなのか」という疑問が生じる。さらに、疏家や宗家の教理を逐一解釈していくと、二重だけでは解釈しきれない部分が生じれば登場する。それに伴い、いくつかの矛盾も生じてくる。そこで新義学派は、それらの矛盾を巧に会通し、古義とは異なる独自の教学を確立してきた。その代表が加持身説や四重秘釈など教主義に関わるものである。教主を加持身とすることで、それまで唯仏与仏とされてきた如来内証の境界を未だ覚らぬ衆生の聞き得ることが認められた。新義学派において、法身（加持身）は未だ覚らぬ衆生（未来機・真言機）のために説法する。つまり、法身説法に対し、「唯仏与仏の自受法楽」という解釈に、「法身から衆生へ」という対機的な説法の解釈が加えられた。⁽¹⁾そして新義学派は、四重秘釈の頂点（第四重）に法身でも説くことのできない究極の境界を登場させた。これこそが、伝統的に新義教学とされるものであり、新義独自の教学である。

（二）「阿字本不生」解釈からみる二系統

先述の通り、真言教学には阿字本不生の解釈に表徳的解釈と遮情的解釈の二系統がある。先行研究によれば、

大きく二系統に分けたのは覺鑒に始まるという。⁽¹²⁾そこで、覺鑒の『㊦字問答』をみてみると、

問う、㊦字本不生の義とは何かと云う事ぞや。答う、此れに略して二義あり。一には遮情の義、二には表徳の義なり（興全下、一〇一九頁）

と、阿字本不生には表徳・遮情の二義あることが示されている。『㊦字問答』ではこの後、「本より已来自性空無」なる遮情的解釈と、「本来本有」なる表徳的解釈の詳しい説明が述べられていくが、⁽¹³⁾このような覺鑒の記述によって、真言学派では阿字本不生に対する二つの見方が定着し、淨嚴や運敵の時代に到るまでその思想は展開された。⁽¹⁴⁾

三、頼瑜の解釈

頼瑜は『㊦字秘釈』⁽¹⁵⁾の中で、本不生について、

問う。「本不生」とは何なる義ぞや。答う。「本」とは本来本初なり、「不生」とは常住寂然の義なり（…略）問う。何が故にか本不生、本来常住の義を顯すや（…略）今は是の如くの生滅無常の義を遮して、本来常住の理を顯すが故に（川崎、八六〜八七頁）

と述べており、本有常住なる表徳的立場にあることがわかる。そしてそのことは、

今、案ずるに、既に阿字より一切言語を生ず、一切言語は一切因縁生を表す。故に知んぬ、一切法は本不生より生ずるが故に、諸法の生ずるを見る時、即ち本不生を解するなり（川崎、一〇〇頁）

と、阿字を一切法の根源と捉え、さらに、

今宗は事に即して而も真なるが故に、煩惱は即ち宝聚門と成るなり。問う。即事而真ならば、何ぞ仮相と云

わずして、而して実相と云うや。答う。仮相即ち実相なるが故に（…略）生住異滅の仮相を動ぜずして、而も性仏性然の四漫なるが故に（川崎、一一一―一二二頁）

と、即事而真や仮相即実相として一切法を有的に捉えることから窺える。

この阿字本不生を表德的に解釈する姿勢は古義学派に近い。新義学派には、顕密対弁と自宗細論の二つの立場を使い分け、自説を述べる特徴がある。顕密対弁する時には古義と同じような解釈を示し、自宗細論する時には古義と対峙し新義独自の解釈を示す。阿字本不生に対しても、一見すると古義と同じような解釈をしているかに見える。おそらくこれは対弁門としての解釈である。

しかし、『「阿」字秘釈』には新義学派としての細論門に即した解釈も見ることが出来る。

問う。若し爾らば、自宗所観の月輪「阿」字は、有相を極と為とや為ん、將た無相を極と為とや為んや。答う。有相と無相を合論するに、応に四種の積あるべし（…略）先ず浅略の積に依らば、謂く九種迷情の妄仮の色相を遮するが故に（…略）是れ則ち初重の無相なり。また、表徳顕実の中に於いて両積あり。若し深秘に依らば、心月輪は是れ白色円形なり（…略）「阿」字は方形金色なり（…略）是れ第二重の有相なり。若し秘中の深秘に依らば、謂く草木国土是れ本有の「阿」字なり。何ぞ唯だ心上に観ぜん。頭尾手足みな性徳の月輪なり。誰か強ちに胸中を指さん。故に『住心論』の第三に云く「若し「阿」字門に入らば、悉く一切の相を離るの相は相として具せざること無し」と文り。疏に云く「相に即して無相なり、無相に即して一切の相を具すなり」と文り。是れ即ち第三重の無相なり。第四重の無相とは、秘秘中の深秘の義なり。所謂る如義語も及ばず、一一心も縁ぜず、但だ是れ不二心なるのみ。之を法身の自証と謂い、之を秘宗の玄底と号す（川崎、五九―六〇頁）

と、阿字について四重秘釈を用いて解釈している。これをまとめると、次のようになる。

- 第一重の無相―浅略……………遮情
- 第二重の有相―深秘……………表徳
- 第三重の無相―秘中の深秘……………表徳
- 第四重の無相―秘秘中の深秘……………法身内証

そして注目すべきは、頼瑜はこの後、

第三重の無相は甚深なりと雖も、猶しこれ勝慧に被る利益の説なるが故に、誰か「我れ、本より言あること無き」の自証の位に同ぜん（川崎、六一頁）

と、表徳なる第三重の無相の境界と法身内証たる第四重の無相の境界とは位層が異なると述べるのである。同じ無相でも、第三重と第四重の無相では位層が異なるという。つまり、新義学派にとつての極位を第四重とし、この第四重の境界が第三重までとは隔絶すること示している。

なお管見の限り、頼瑜は遮情なる第一重と表徳なる第二重・第三重の位層の關係については論じてはいない。すなわち、遮情から表徳へという連続性は述べられない。従つて、頼瑜の解釈からは、第一重の遮情の境界が、第二重・第三重の表徳につながるのか、あるいは隔絶するのか判断することはできない。

頼瑜の阿字本不生解釈を整理しておく。

・阿字本不生に對し、表徳的解釈をする。

・四重秘釈を用いて、真言密教の極位は表徳門（第二重・第三重）よりさらに一段階上の無相の境界（第四重）にあることを述べる。

・第二重・第三重と第四重が隔絶することは述べるが、第一重と第二重・第三重の関係については論じていない。

四、聖憲の解釈

聖憲の阿字に関する著作には『阿字観』がある。¹⁶『阿字観』は、運敵の『結網集』に全文が引用されていることから、運敵にとつても注目度の高い著作であつたことが窺える。

聖憲の立場は、

只だ一箇の愛憎の念の上に於いて頻に阿字を挙げよ（…略）この時塵境則ち自家の具徳にして煩惱全て表徳の実義なり（大日仏六八、一三七頁上）

と、表徳的立場にある。また、そのことは「遮情の観は顯乗の謂情なり¹⁷」とあることから窺える。すなわち、頼琿と同様の立場である。『阿字観』は短い著作であるため、頼琿のように四重秘釈に絡めた直接の言及はない。しかし本書の最後に、「上上根智の人のもつぱら超え直ちに如来地に入るを除非して、自余の浅根は専ら之に憑りて用心するのみ¹⁸」とあることは注目に値する。聖憲は、直ちに如来地に到ることのできる上根上智の機根の者は阿字観を修する必要がなく、その他の浅根の者は阿字観に心を振り向けなさい、と忠告している。つまり、阿字観は直ちに如来地に入ることのできない浅根の者のための修行である。

そこで、聖憲の他の著作（『大疏第三重』）をみると、真言の機根について四重秘釈に即して言及している箇所

がある。新義教学において、四重秘釈と機根論は密接な関係にあり、それは聖憲においても同様である。¹⁹⁾ 新義字派の四重秘釈において、真言機は第二重と第三重に配当される。そして、加持身によって劣慧機のために第二重が説かれ、勝慧機のために第三重が説かれる。

聖憲は、劣慧機と勝慧機の相違について、

未来の実行において勝恵劣恵の二機あるべきなり。拈地造壇等の軌則は劣恵の機に被る説なり。举足下足等

の当相即道の教文、問之にありて勝恵に被る教文なり（『発心即到』大正七九、六三三頁上）

と、劣慧機には拈地造壇等の軌則が説かれ、勝慧機には举足下足等の当相即道が説かれることを述べている。また勝慧機について、劣慧機と比較し、次のようにも述べる。

菩提心の外に修行無しと言うこと、実に分明なるをや。然れども、此の正意に契い難き劣機あるが故に、重

ねて五相三密の行体を出して「当に須らく具さに三密の行を修して」等と言うなり（…略）故に観行を用う

とは云うべからず（『発心即到』大正七九、六三六頁上）

つまり、劣慧機は観行を用いるが、勝慧機は菩提心があれば観行を用いる必要がないという。従って、聖憲が『阿字観』で「阿字観に用心すべし」とする浅根とは、第二重の劣慧機に当たると考えられる。さらに、

設け無相の一機ありて、皆成密印の道理を信ずるが故に、供養の軌則を用いざるも、しばしば此の観心に安住せば即ち是れ無相三密の修行なり（大正七九、六三五頁上）

と、軌則（観行）を用いない無相の三密行を挙げる。無相の三密行とは、身口意のあらゆる所作が三密そのものとしてなされることである。すなわち、体を動かせばそれがそのまま身密となり、口を開けばそれがそのまま口密となり、心に念ずればそれがそのまま意密となる。『阿字観』には、

客と酬対する処、喫飯著衣の処、阿尿送尿の処、喜怒哀樂の処、此の如く一切時に於いて、只だ一箇の阿字を挙げよ。之を思うこと、此に在り。十二時中、切に忘することなかれ（大目仏六八、一三六頁下）

と、常に阿字を觀じていることの重要性が記されている。すなわち、しようと思つてする修行ではなく、常に、行じていることが重要なのである。そしてこのことは無相の三密行につながってくる。つまり、聖憲の目指す阿字觀とは、軌則に基づく行法としての阿字觀ではなく、常に阿字を觀じ続けることなのである。阿字觀という有相の三密行（第二重）を積み重ねること、少しずつ行住坐臥の中に阿字が溶け込み、常に阿字を觀じ続ける無相の三密行（第三重）へと移行することが目指される。換言すれば、第二重から第三重への移行が目指されている。

聖憲の阿字本不生解釈を整理しておく。

- ・ 阿字本不生に對し、表德的解釈をする。
- ・ 阿字觀は第二重の浅根のための觀行であるとする。
- ・ 常に阿字を觀じることの重要性を主張する。
- ・ 第二重の有相の修行から第三重の無相の修行への移行を目標とする。

五、運敵の解釈

運敵の阿字本不生解釈を概観すると、先行研究での指摘の通り、遮情的側面が強調されている。⁽²⁰⁾ また、運敵教の特徴の一つとして、密教と一乘を連続するものとして捉えることが挙げられるが、それは阿字に関する著作においても見ることができる。⁽²¹⁾

阿字本不生に関する運敵の著作には、『開箇編』・『開箇編弁疑』・『本不生顯密同異義』があり、これらは淨敵との論争の書としても有名である。⁽²²⁾『開箇編弁疑』には、

密教の遮情の觀門と顯教無自性の觀解と、説、別にして、義、同じ。諸法本不生の觀智を出でず（…略）顯教の極理は遮情の説に同じ（石村、二一―二二頁）⁽²³⁾

と、顯教の極理を觀する無自性觀と密教の遮情觀はその義が同じであることが示され、ここに運敵教学の特徴である密教と一乘の連続性を見ることができると。

また運敵は、他の真言学僧の阿字本不生解釈について、「經疏を枉解して、表徳を間錯す」⁽²⁴⁾などと、密教＝表徳とすることに警鐘を鳴らしている。但し、これは密教の表徳的な見方を真つ向から否定しているわけではない。「本不生の觀は遮情表徳に通ず」⁽²⁵⁾と、本不生には遮情・表徳の両面があることは認めている。その上で、「不生の言は遮情を要と為す」⁽²⁶⁾と遮情の面を強調する。しかしそれは、

遮情を觀ぜずんば何に縁りてか無相を覺らん。無相を覺らざれば何に縁りてか表徳を見ん（石村、三二―三三頁）

というように、遮情觀のみに止まるというのではなく、遮情觀を要として、遮情を経たうえで表徳へ進めというものである。そして、

無相を究めずは焉ぞ真の表徳を見ん。無相の菩提心、実には無量恒沙の功德、秘密甚深の事を具す。是れ謂る表徳なり（石村、三五頁）

と、無相（遮情）を究めたところこそ実は真の表徳に他ならないと説明している。すなわち、運敵の主張は、「遮情を経ず、直接的に表徳へ到る」とする解釈への忠告であり、言い換えれば、やみくもに密教＝表徳とすること

への警鐘である。そのことは、

今時の真言師、宿匠と称する者、多く此の義を思はず。無相空寂の説を斥て即順常途と会し、凡所執の有を指して自家の表徳と為す（石村、三三頁）

と述べていることから窺える。遮情観を経なければ、いくら密教＝表徳と叫んでも、それは所執の表徳に過ぎないというのである。

さらに、『本不生顕密同異義』には、より詳しく表徳・遮情の關係が説かれている。

顕教は権実殊なりと雖も、共に無相絶離を以て宗極と為す。而ども、真言門の初地無相の菩提心を出す。此の分は顕の極位と密の初地と大同なり。密教には之を遮情の観と謂う。此の上に、密教には表徳の観有り。

顕乗と懸隔せり（石村、六八頁）

と、密教の遮情の境界は顕教の極位に相当し、それは密教の初地であるという。そして、密教はさらにこの上に表徳を見るという点で顕教とは相違する、と主張している。また、この表徳観については、『十住心論』²⁷を引用しながら、

住心論に云うが如し、一切世間、縁起の法の種種の色、種種の形、種種の相を具す。若し、阿字門に入りぬれば、悉く一切の相を離る。離相の相は、相として具せざること無し。是れ則ち、法身の普現色身なり。各各に四種曼荼羅を具すといえり。所謂、表徳の本不生観、是なり（…略）若し、無相大空の阿字門に入らずば、底に縁てか無量甚深の表徳、無尽莊嚴の本具を覚ん（石村、六九頁）

と述べている。前述したように、運敵の解釈によれば、遮情を究めたところに表徳の境界が顕れる。そしてその遮情を究めたところとは、悉く一切の相を離れた境界であり、その境界を表徳的に見れば、「相として具せざる

こと無し」であるという。つまりその境界は、悉く一切の相を離れた境界にして、相として具さないものはない境界である。すなわち運敵は、無相（遮情）を究めれば、無相にして一切の相を具えるという表徳に行きつく⁽²⁸⁾と考えている。

運敵の阿字本不生解釈を整理する。

- ・阿字本不生の遮情面を強調する。
- ・但しそれは、やみくもに「密教＝表徳」とすることへの忠告であり、阿字本不生は表徳・遮情の両方に通じ、遮情観を究めたところに表徳を観るとするものである。
- ・ここに、遮情から表徳へ、言い換えれば顕教から密教への連続性がみられる。
- ・その遮情を極めた表徳とは、悉く一切の相を離れながら、相として具せざることのない境界であるという。

さらに、運敵は四重秘釈について、次のように言及している。顕密の相違に関して、古義学派のような二重の解釈では、「顕教も密教も果分自体は同じなのか」という疑問が生じるとは先に述べたが、運敵はこれについて、『大疏啓蒙』の中で次のように解答している。

或が問う、草子に云く、「第四重の無相を立てる学者は、華嚴の因果二分の法門に擬して此の義を安立す」と云々。若し彼の因果二分の法門を以て密の第四重と為せば、自宗の至極は華嚴の意に同ずる歟。二教論を按ずるに云く、「因分可説とは顕教の分齊、果性不可説とは即ち是れ密蔵の本分なり」と文り。此の釈の意の云く、彼の果性不可説の重を説きて密蔵と為すと（為言）。若し彼の教の不可説の義に擬して、不可説を

以て密蔵の極と為せば、顕密の優劣何処に在るや。答う、彼は不可説にして果分を説かざるには非ず。密蔵と為れば、密の四重の中の第二重第三重の法門と成るが故に。第四重は華嚴の果性不可説の法門に似たり。

所以に「擬」と云う。彼の不可説の位に同ずと謂うには非ず（智全一、五六四頁上下）

つまり、密教において可説なる果分とは、四重秘釈の第二重・第三重の境界であり、その境界は極位なる第四重とは位層が異なるという。これは頼瑜の主張と同様である。また、運敵教学の特徴の一つは顕密の連続性を説くことにあると先に述べたが、運敵は四重秘釈に対しても、「非黄等の文を初重と為すと云うと雖も、実には浅深に亘り、亦た密に通ずと知んぬべし」と、初重（第一重）の顕教が密教に通じることを主張している。つまり、第一重と第二重・第三重とは、同じ位層を遮情的にみるか表德的にみるかの違いであり、そこに位層の差別はないという。そしてこの主張は、頼瑜には見られなかったものである。

これらのことから、運敵は第一重と第二重・第三重に顕密の連続性を認めながら、その一方で、密教の極位たる第四重は三重以前と隔絶すると主張している。

四重秘釈に関する運敵の主張を整理する。

- ・第一重と第二重・第三重には連続性がある。
- ・第一重は顕教の極位である。
- ・第一重と第二重・第三重の位層は同じであり、その同じ位層を遮情的にみるのが顕教で、表德的にみるのが密教である。
- ・第三重以前と第四重では位層が異なり、第四重こそ密教の極位である。

ここまで運敵の阿字本不生に関する言及をみてきたが、運敵の主張には「密教は表徳、顕教は遮情」と、単純に顕密を隔絶することへの忠告が含まれている。

『開闢編弁疑』などは浄敵との論争の書として知られるが、それらは浄敵への反論だけに留まらず、頼瑠以来の新義教学を今一度体系づけ、古義教学との相違を明確に打ち出すことにあつたのではないか。なぜなら、前述したように、頼瑠以来の新義学派は、顕密を対弁して論ずる時と自宗において細論する（古義と対峙する）時と、その立場を使い分ける傾向にある。そして、顕密対弁の時には、古義と同じような解釈をする。一方では顕密対弁として古義と同じ立場を取りながら、一方では新古対弁として古義との相違を強調する。運敵は、そのような新義教学の曖昧な部分を取り除き、古義と対峙する新しい新義教学を打ち出そうとしたのではないか。確かに運敵は、頼瑠以来の新義教学を受け継いでいる。しかしそれだけでなく、運敵には、頼瑠以来の思想を深め、新たに展開し、整理し直す姿勢が見える。そして運敵のこのような姿勢によって、新義教学は継承と創造がともになされ、智山教学へと展開された。

六、おわりに

阿字本不生に対する解釈はこれまで、古義系は表徳・本有常住説、新義系は遮情・無自性空説と括られ、あたかも新義学派の伝統的な解釈があるかのように認識されてきた。言い換えれば、頼瑠や聖憲をはじめとした新義学派の学僧における解釈の展開を捉えることなしに、阿字本不生に対する新義教学の伝統が創造されてきた。しかし、頼瑠・聖憲・運敵という三者の解釈を比べてみると、新義系＝遮情・無自性空説として必ずしも一概には

括れないことが分かった。阿字本不生について、頼瑜と聖憲は表德的解釈をし、運敵は遮情的解釈をする。但し、運敵のそれは表德的解釈を真つ向から否定するわけではなく、やみくもに密教＝表徳とすることへの忠告であった。

また、三者の見解を四重秘釈に即してみると、頼瑜は第四重と三重以前の関係性は論じるものの、第一・二・三重の関係については論じていない。一方で聖憲は、第二重と第三重との関係性を語っている。そして運敵は、第一重と第二重・第三重の連続性を主張する。すなわち、頼瑜→聖憲→運敵という新義教学の展開を辿ることで、第一重から第四重まですべての関係性を知ることができ、頼瑜から聖憲を経て、運敵へと相承する中で、新義教学が整理され、深化され、体系化される様子を見ることができた。

註

- (1) 弘全一、四六九頁
- (2) 高神覚昇『密教概論』（文政堂、一九七〇）、一〇六頁
- (3) 宮坂宥勝「阿字本不生考―空を問う―」（『智山学報』四七、一九九八）、五三頁
- (4) 前掲宮坂、五三頁
- (5) 新義学派の展開をみるならば、運敵へと流れる智山学派のみならず、豊山学派についても言及しなければならぬが、紙幅の都合と筆者が智山派に属することにより、本稿では豊山学派は扱わない。
- (6) 元山公寿①「運敵の教学的立場について―聖憲との比較を通して―」（『新義真言教学の研究』、二〇〇七）、同②「智山教学とは何か―闡明定性の論義をめぐって―」（『現代密教』一七、二〇〇八）、小林靖典「新義真言教学における伝統について」（『現代密教』二八、二〇一七）等参照。
- (7) 金山穆韶『弘法大師の仏教』（新密教社、一九二二）、一六〇～一六七頁
- (8) 石村祐天『阿字本不生の世界』（一九九四）、三頁
- (9) 前掲宮坂、五三～五四頁
- (10) 近年の学僧の解釈については、前掲宮坂論文の中で紹介さ

れている。それによれば、金山穆韶は蓮敵の無自性空説を未了義とし、加藤精神は淨敵の本有常住説を否定している。従つて、両者は新義・古義の伝統を意識しているようにも思われる。また、松長有慶・松本照敬・『密教辞典』・『哲学辞典』は本有常住説、神林隆淨・小野塚幾澄・『密教大辞典』は無自性空説、高神覚昇・金岡秀友は折衷説（合様説）に寄るが、おそらくこれらは新義・古義を意識したものでないであろう。宮坂自身は、如来蔵的に解釈すれば本有常住ともなりうるが、それは仏教の本義から乖離しており、真の表徳とは言えないと断じ、阿字本不生とは「諸法の生起の否定ではなく、諸法の生起の根本原因である本初（の存在）の否定でなければならない（六四頁）」と主張している。

(11) この解釈が顕教的だと批判されることがあるが、新義教学における加持身の特機説法は、顕教のそれとは大いに異なる。ここである「対機なる説法」とは、顕教のような対機説法ではなく、真言機に対して加持身が如義語をもつて説法するものである。

(12) 前掲宮坂、五三―五四頁。なお、覚饒と同時代の実範も、『阿字義』において、「阿字之字相字義実相之有相無相事」の段を設け、有相・無相の視点から阿字について論じている。

(13) 興全下、一〇一九―一〇二四頁。真言教学においては、阿字本不生解釈の二系統とともに、もう一つ注意しておくべ

き問題がある。それは「阿字本不生」というタームである。そもそも空海は、阿字本不生について、『秘蔵宝鑰』の中で、「阿字とは一切諸法本不生の義なり（弘全一、四六九頁）」と定義づけており、阿字＝一切諸法本不生と解釈している。また、『声字実相義』では、「阿の声は何れの名を呼ぶ。法身の名字を表す。即ち是れ声字なり。法身は何の義かある。所謂法身とは諸法本不生の義、即ち是れ実相なり（弘全一、五二一頁）」と述べており、阿字＝法身＝諸法本不生＝実相と釈している。しかし、いつの頃からか「諸法」の語が除かれ、真言宗においては「阿字本不生」というタームが定着した。これについては、少なくとも覚饒の頃には「阿字本不生」がタームとして使われていた。それに伴い、

空海による「阿字とは一切諸法が本不生たること」という解釈に加えて、「阿字とは本不生である」という解釈がなされるようになった。先述の通り、覚饒は阿字本不生について遮情・表徳の二義を挙げる。覚饒のいう遮情の義とは一切諸法の自性の空無を明かしたものである。一方の表徳の義は十義挙げられ、前半の五義は阿字の諸法本不生について論じているが、後半の五義は本・不・生の語義解釈のようになっており、必ずしも阿字の諸法本不生について論じているわけではない。すなわち、覚饒は「本不生」の語に注目しており、それに伴い、「阿字とは一切諸法が本不生である」ということへの意識が薄まっていた。さらには、空海が「阿字＝一切諸法本不生＝法身」と解釈したの

- に対し、覚鑊は法身のみにとどまらず本・不・生に法身・応身・化身を配当するなど、空海の字義釈よりも無限性を有する解釈を行っている。ここからも「阿字諸法本不生」から「阿字本不生」へという真言教学の解釈の創造をみることができ、この問題については本稿ではこれ以上立ち入らないことにする。
- (14) 金岡秀友『密教の哲学』（平楽寺書店、一九六九）に「十二世紀の覚鑊によって端を起した阿字本不生の二つの見方は、時を経て、十七世紀の淨厳・運敵によって発展をみせる（六二頁）」とある。
- (15) 本稿で扱う『**阿字秘釈**』の頁数は、『頼瑠記 **阿字秘釈** 国訳』（川崎大師教学研究所叢書第一巻、二〇二二）に従う。
- (16) 『阿字観』に関する研究には、粕谷隆宣「中性院聖憲師と阿字観」（『新義真言教学の研究』、二〇〇七）等がある。
- (17) 大日仏六八、一三七頁上
- (18) 大日仏六八、一三七頁上
- (19) 聖憲の機根論については、鈴木雄太「聖憲の機根観——『大疏百条第三重』を中心として——」（『仏教文化学会紀要』二六）参照。
- (20) 渡邊晃秀「運敵僧正の晩年期の教学について——『本不生顯密同異義』を中心に——」（『智山学報』五九、二〇一〇）参照。
- (21) 前掲元山論文②では『大疏啓蒙』の中から『闡提定性』の算題を取り上げ、「運敵が、顯教の一乗を密教と連統的にとらえ、密教の一部と解釈していた（二二七頁・取意）」と分析している。また、前掲渡邊論文でも「運敵の晩年期における特徴は（省略）顯教と密教の間には断絶にも等しい差があるというのではなく、その連統性を認めた事にある（九九頁）」と指摘される。
- (22) 運敵は『大日経』や『大日経疏』に基づく「菩提心の統生」の立場から密教と顯教の連統性を認めるという伝統的な真言教学とは異なる見解を提示した。これに対し、淨厳は顯教と密教の差は大きく、両者に連統性を認めるべきではないとする立場から、運敵の見解に疑問を投げかけた。詳しくは前掲渡邊論文参照。
- (23) 本稿で扱う運敵の著作の頁数は、前掲石村に従う。
- (24) 前掲石村、二四頁。運敵は、空海偽撰の『雜問答』や『守護国界経釈』が真撰として用いられてきたことが真言密教の表徳門への執著の一因であるとする。
- (25) 前掲石村、三一頁
- (26) 前掲石村、三二頁
- (27) 弘全一、二五一頁
- (28) この境界は、先に引用したように、頼瑠のいう四重秘釈の第三重に当たる。
- (29) 智全一、五六〇頁上
- 〈キーワード〉
伝統の創造 新義真言教学 阿字本不生 頼瑠 聖憲 運敵